

特集：在日コリアンの過去・現在・未来

「コリアン・ディアスポラ」に関する 試論的考察

——観点の「省察」と「模索」

ラ キョンス
羅 京洙 学習院女子大学准教授

キーワード：「コリアン・ディアスポラ」、ナショナリズム、アイデンティティ

本論文は、国境を越えるコリアンのダイナミックな国際移動に関する歴史・現状・展望を明らかにすると同時に、彼らの越境・移動という現象をめぐる従来のさまざまな言説を批判的に検討した上で、新たな観点の提示を試みるものである。その主な内容として、次の4点が挙げられる。第一に、近現代におけるコリアンの国際移動に関する歴史的背景を、ロシア、中国、日本、アメリカへの越境・移動を中心に概観する。第二に、人の国際移動という事象に関するこれまでの主な理論とその変容をふまえた上で、多様な歴史的背景を持つコリアンの国際移動という現象を理論的にどう理解すべきかを再考する。とりわけ、まだ十分に検討されていない既存の「移民」と「ディアスポラ」という理論・概念の特徴と限界を検討する。第三に、これらの歴史的背景と理論的検討をふまえて、全世界の「コリアン・ディアスポラ」社会に共通して見られる特徴を、ナショナリズムとの関係性およびアイデンティティの重層性という二つの観点から考察する。最後に、これまで国家／民族という枠組みの中で認識されてきた「コリアン・ディアスポラ」を、国家／民族という単位を超越し、少なくとも境界の枠外である東アジアという地域の単位で国境を越える「トランスナショナルな存在」として新たに位置づけることを提案する。

1 はじめに

韓国政府の発表によれば、2013年現在、およそ701万人のコリアン¹が朝鮮半島を除く全世界の181の国家・地域で暮らしている（韓国外交通商部編、2013：39-40）。図1は、国境を越えるコリアンの世界的広がりを見せている。韓国外交通商部編『在外同胞現況』（2013年）のデータに基づき、世界地図上にその主な移動先を矢印で示してみると、コリアンが、拠点である朝鮮半島から全世界のあらゆる方向へと移動しているという、「人流・民流」のダイナミズムが浮き彫りになる。具体的には、アジア地域への移動者数はおよそ395万人、北米・中南米241万人、欧州62万人、中東2万5千人、アフリカ1万人など、全世界への移動者数は合計701万人余りである。

図1 コリアンの世界的分散



出所：韓国外交通商部編『在外同胞現況』（2013年）をもとに筆者作図。

コリアンの国際移動に対する学問的関心は、他の分野に比べて決して高いとは言えない。その中でこれまで数多くの先行研究が出された背景にはその歴史性がある。コリアンの国際移動の歴史と共に、それに関する研究も知らず知らずのうちにやられてきた。また、テーマの特殊性によって、韓国国内だけでなく、彼らが移動した現地での研究も数多くある。こうした関連研究の蓄積は、コリアンの国際移動への関心が少しずつ高まっていることを意味する。

しかし、このような量的拡大にもかかわらず、当該研究は依然として多くの課題を残している。まず、その多くがそれぞれのコリアンが移動した特定の国家・地域における民族差別や現地適応の問題群を取り上げるとどまっておき、彼らの国際移動を包括的に網羅した比較研究は非常に乏しい。たとえば、この学問分野を扱う数少ない学術団体の一つとして在外韓人学会（Association for the Studies of Koreans Abroad）があるが、その学会誌『在外韓人研究』に掲載されている多くの論文もその傾向にある。同誌の創刊号（1990年）から第31号（2013年）までに載せられた論文の内容を見ても、特定地域へ移動した個別集団に関する研究が大部分を占めており、コリアンの国際移動に関する総合的・学際的なものは非常に少ない。これらの個別的な研究は、コリアンがそれぞれのコミュニティにどのように移動と定着を果たしたのかを知るには大いに役立つ反面、彼らの国際移動の全体像をつかむことには適していないという盲点がある。そのために、コリアンの国際移動を（ミクロ的な面も考慮しつつ）マクロ的に考察する本論文は、異なる時空間へ移動したそれぞれの越境コリアンを総合的に捉えられる「比較」の観点を与える研究として位置づけられる。

また、グローバリゼーションの進展と共に、ヒト・モノ・カネ・情報の越境現象が活発に行われる中、コリアンの国際移動に関する研究もこれらの流れを反映し、同胞（民族）研究→ディアスポラ研究

→多文化主義 (multiculturalism) →トランスナショナリズム (transnationalism) の方向へと向かっており、その進化の速度も非常に速い。このような観点と言説の変化は、「コリアン・ディアスポラ」とその社会をめぐる急激な環境変化と彼らのアイデンティティ変容によるものであるということはいうまでもない。

2 「コリアン・ディアスポラ」社会の形成と展開

本節では、コリアンの国際移動に関する歴史的背景について触れたい。人類の歴史は移動の歴史と言っても過言ではないくらい、人々の異なる地への移動は古くからの現象である。朝鮮半島の人々の集団的移動の歴史を辿ると、4世紀から7世紀半ばまで存続した三国時代にまで遡ることができる。しかし、これらの時代は、現在のような国境概念がなかった時代である。本論文では、19世紀半ば以降の近現代における国際移動史のみを研究の範囲とする。19世紀半ばは、現在の朝鮮半島という同一地域に住んでいた多くのコリアンが故郷を離れて海外に出た時期であり、また、およそ701万人にのぼる今日の越境コリアンを生み出す始発点となった時期でもあり、現在においても移動の歴史的連続性が見られる。以下では、東西南北全方位に向かって行われたコリアンのダイナミックな近現代移動史を、ロシア、中国、日本、アメリカへの移動を中心に概観する。なお、表1は、2013年現在、「コリアン・ディアスポラ」が多く居住する上位20位の国家をまとめたものである。

表1 「コリアン・ディアスポラ」の多数居住国とその人数

(単位:名)

| 国名 | 人数 | 国名 | 人数 |
|---------|-----------|----------|--------|
| 中国 | 2,573,928 | ブラジル | 49,511 |
| アメリカ | 2,091,432 | イギリス | 44,749 |
| 日本 | 892,704 | インドネシア | 40,284 |
| カナダ | 205,993 | ドイツ | 33,774 |
| ロシア | 176,411 | ニュージーランド | 30,527 |
| ウズベキスタン | 173,832 | アルゼンチン | 22,580 |
| オーストラリア | 156,865 | シンガポール | 20,330 |
| カザフスタン | 105,483 | タイ | 20,000 |
| フィリピン | 88,102 | キルギス | 18,403 |
| ベトナム | 86,000 | マレーシア | 14,000 |

出所: 韓国外交通商部編 (2013: 40)。日本の場合は帰化者を含む。

^{コリョサラム}「高麗人」と呼ばれる人々のロシアへの越境は、1860年代にさかのぼる。朝鮮半島のコリアンが、長い国境線を隔てて接している中国大陸ではなく、最初にロシア地域へ越境した理由は、当時の中国には「封禁令」があって、朝鮮半島の人々の越境が禁じられていたからである。また、当時の朝鮮王朝も、国境を越える人々には「越境罪」という厳罰を適用したと言われている。儒教文化の影響を強く受けていた当時の朝鮮半島の人々にとって、生まれ育った故郷を捨てて他の地に移るということは、その家族と本人にとって恥ずべきことであった。それにもかかわらず、中央政府の失政

に不満を抱く(「両班」と呼ばれる)一部の貴族階級と生活に苦しむ農民たちは、ロシアの沿海州へ向かった(鄭, 1995: 23)。

度重なる移動を繰り返してきた高麗人の人生は、まさに「流転」の人生そのものであった。19世紀半ばより朝鮮半島からロシアの沿海州へ移動し、日本の韓国併合後にはその植民地支配を嫌ってさらに多くのコリアンが沿海州へ移動して「高麗人」となった。1937年にはソ連のスターリンによって「日本のスパイ」とされ、多くの高麗人が集団的に中央アジアの各地へ強制移住させられた。この悲劇的強制移住の経験は、高麗人にとって忘れられないトラウマとなったことは言うまでもなく、そのような経験から彼らをコーエン (Cohen, 1997) の言う「犠牲者としてのディアスポラ」と捉えることができる。現代の冷戦時代を経て、彼らはさらなる変革期を迎えるようになった。1980年代のペレストロイカや1991年のソ連崩壊などを経て形成された独立国家共同体 (CIS: Commonwealth of Independent States) の国々には自民族中心主義が台頭し、高麗人は居住する国々の状況によって再び移動をするかどうかという選択の問題に直面した(韓国外国語大学歴史文化研究所編, 2003: 12)。とくに1990年代からは、中央アジアの政治経済的な不安定を避け、極東の沿海州へ再移動する高麗人が年々増加している。1937年に追放され、再び「ふるさと」の沿海州へ戻るという形である。朝鮮半島→沿海州→中央アジア→沿海州という苦難の流転人生は今日も続いているが、「高麗人」としてのアイデンティティを保ち続ける彼らはたくましく生活している。

「朝鮮族」と呼ばれるコリアンの中国への移動は、1860年代から本格的に始まった。1945年の解放後、(一部を除いて)ほとんどの人々が故郷の朝鮮半島に帰還せず、遼寧省・吉林省・黒龍江省からなる東北三省を中心とする今日の朝鮮族コミュニティを形成した。朝鮮族は中国全地域に散らばってはいるものの、その9割以上が東北三省に集中して居住している。

一方、歴史的な経緯を持つ従来の朝鮮族とは異なり、近年では「新朝鮮族」と呼ばれる存在も登場した。彼らは、韓国から中国へ移動した近年のニューカマー韓国人たちである。彼らの中国への進出は、韓中関係の改善、韓流現象の拡散、中国の資本主義化、高まりつつある中国の国際的プレゼンス、韓国人の中国文化への関心などの流れと関係している。「旧朝鮮族」と「新朝鮮族」は、「同胞」という特殊な間柄を積極的に活かして共生している。北京では全国朝鮮族企業人経験交流会において同胞企業家同士の親睦と交流が行われ²⁾、さらに、韓国人が経営する会社に多くの朝鮮族が就職している。しかし、こうした共生関係の裏には対立関係の側面もある。たとえ「同胞」と言っても、「新朝鮮族」の韓国人は朝鮮族を「田舎くさい」と認識し、朝鮮族は、「韓国人女性と朝鮮族男性との結婚は非常に少ないことだけを見ても、互いが近づくには程遠い関係」と感じている³⁾。このように、人の国際移動をめぐる現在の朝鮮族コミュニティは新しい時代を迎えている。

「在日」と呼ばれるコリアンの日本への移動は、周知のように、日本による植民地支配が始まる1910年から本格化する。解放を迎えた1945年以降の現代では、在日本大韓民国民団(民団)と在日本朝鮮人総聯合会(総連)という二つの民族団体が組織され、両組織が在日コリアン社会を主導してきた。しかし、この両団体は、在日コリアンの権利保護よりも南北朝鮮のそれぞれのイデオロギーに従った理念対立を繰り返し、日本社会と在日コリアン自身からも非難を浴びることもあった。その結果、1980年代からは、どちらの団体にも属さないという「第三の道」を選択する在日コリ

アンが増えた。関連研究においても、民団と総連のポリティックスによって二分され、立体的であるはずの在日社会を画一的な認識下で研究する傾向があった。政治性と複雑に絡み合っている在日コリアン研究は、彼らが日本社会の中でマイノリティであるのと同様に、他の研究分野に比べてそれほど人気はなかった。これまでの研究は、民族差別問題と歴史問題に関するものに集中された。こうした在日研究の低迷を打開するためには、戴エイカ（1999）も指摘するように、固定された場所をその理論的枠組みとする領土・地域・国籍などに焦点を合わせる従来のアイデンティティ研究に警鐘を鳴らす必要がある。

近年、また新しい変化が在日社会に起きている。在日社会の内部対立の先頭に立ってきた民団と総連の両組織が和解の動きを少しずつ見せ始めている。一方、在日一世とその子孫たちを軸にする、既存の在日社会とは異なるグループも出ている。1980年代後半からはニューカマーと呼ばれる「新在日」も急増している。このようにますます多元化されていく日本社会における「在日像」が変容を成し遂げようとする中で、在日コリアンを新たな枠組みから再考することが求められている。

「在米韓人」と呼ばれるコリアンのアメリカへの移動は、これまで述べてきたロシア、中国、日本への移動とは異なる意味を持つ。前述の3地域は同じ東アジアに位置しているため移動しやすい。しかし、アメリカへの移動は、太平洋という海を越える遠距離移動であると同時に、コリアンの西欧社会への「通路」を開拓したという象徴性がある。また、アメリカへ移動した最初のコリアンは、農民・流民であったロシアや中国へ移動したコリアンと違って亡命知識人が主流であった。「留学生」という身分で渡米を果たした彼らは、後にやってくるコリアン労働者移民よりは数が少なかったが、彼らは、苦学と独立運動を並行しつつ、現地のコリアン・コミュニティの中でリーダーシップを発揮した。さらに、こうした留学生とは別として、数多くのコリアン労働者もアメリカ（特にハワイ）へ渡った。コリアンのハワイへの集団的移動は、さとうきびプランテーションで働く労働者であったとは言え、政府（大韓帝国）が発行した旅券を持って外国へ移住した初の公式移民として位置づけられている。具体的には、1902年12月22日に最初の121人が仁川を発ち、身体検査に合格した102人が翌年の1903年1月13日にハワイ・ホノルルに到着した。韓国では、これがアメリカへの公式移民の嚆矢として認められている。

日本の植民統治から逃れる政治亡命や留学、ハワイへの労働移民などが続いて、1945年には在米コリアンの数はおよそ1万人にのぼった。その内の70%くらいがハワイに居住し、残りはカリフォルニアなどの本土に定着するなど、彼らは初期のコリアン・コミュニティを形成した一世となった。さらに、1965年前後は、コリアンのアメリカへの移動における重要な時期である。同時期には、アメリカの新しい移民法により、多くのコリアンがアメリカ本土へ移動することができた。この新移民法によって、韓国に割り当てられた毎年2万人のコリアンが招請移民や就業移民などの形で渡米した。これは、上述したハワイへの初期移民とはその性格を異にするもので、現代におけるコリアンのアメリカ本土への移動が本格化する契機となった。

一方、（紙面の都合で詳細は割愛するが）1945年以降の現代におけるコリアンの国際移動は、以上の近代期における移動のように一定の地域に限らず、さらにそのほとんどが韓国政府の海外移住政策の推進を通じて具体化されていく。その主な移動先としては、北米、南米、ヨーロッパ、東南アジ

ア、オーストラリア、ニュージーランドなどが挙げられる。

3 理論的枠組みの再検討

本節では、越境するコリアンの国際移動という具体的な事象への理解を深めるための理論的背景にふれる。人の国際移動に関するこれまでの主な理論とその変容をふまえた上で、多様な歴史的背景を持つと同時に、その動きのダイナミズムが一層増しているコリアンの国際移動という現象を理論的にどう理解すべきかを再考する。とりわけ本節では、まだ十分に検討されていない既存の「移民」と「ディアスポラ」という概念の限界を指摘する。

(1) 「移民」から「移動」へ

まず、人々の国境を越える行為を説明する際に用いられる代表的な概念の「移民」について検討する。移民は、植民地開拓のために行われる「国策」移民の場合も想定できるが、基本的には自発的な移動と見なされる。すなわち、移民とはよりよい生活を求めて本来の居住空間から他の居住空間へと移り住む自発的な行動である。たとえば、20世紀の初め頃にハワイへ渡ったコリアンたちも、自己本位による自由な移民像を描いていた。次の『太平洋雑誌』(The Korean Pacific Magazine)の「移民問題」という記事内容からは、当時の彼らのこうした自発的な移民観を覗き見ることができる⁴。したがって、何らかの強制と圧力によって強いられた移動は、自発性に基づいた移民という行動の本質ではない。

昔は、国々はそれぞれの地を守って互いに往来もせず、移民問題はほとんどなかった。今は万国が門戸を開いて（中略）人々が自由に往来と移住をし、より広く、より良いところへ移っていく。あたかも、井戸と池と川で別々に生きていた魚が互いに群れを成し、良いところへ泳いでいくかのようである。（このような移民を）誰も阻むことはできない。（引用者訳）

これに加えて、人々が移民となる動機に関しても様々な理由が考えられるが、その中でも経済的な側面が最も大きいと言われる。この経済的観点を重んじる「プッシュ／プル」理論は、研究者の間では上述の移民論を支える基礎理論として認識されてきた。これは、国境を越える主体として重要視されるべき個人が「労働力」という経済単位と見なされ、その労働力の需要と供給における二国間の利害関係が一致する際に移民が発生するという理論である。この場合、貧しい開発途上国から豊かな先進国への人口移動が想定されやすく、人々の流れも「国際労働力移動」という用語でよく表現される。「移民」という漢字を分解してみると、「禾（稲）の多い所へ向かう民」という解釈ができる。すなわち、人々は豊富な食糧とよりよい生活を求めて移民になるということである。その意味では、経済学の観点に基づく「プッシュ／プル」という理論にも一理ある。

ほかにも移民をめぐる言説は数多くあるが、その概念が国家という枠組みを人々の越境の基準としているという点においては共通している。移民はいわば「国家間移動」であり、そこには個人の

観点は不足または欠如している。さらに、その国民国家によって行われる移民政策そのものも、移民を促進させるというよりは、「よそものを排除する」論理として働く可能性も排除しきれない⁵。一方、近年では、特定の国家への永住を目的とする移民ではなく、いつでもどこかへ再移動できる短期滞在者 (sojourners) が急増している。このように、国境を越える人々が移民であるかどうかの判断が困難な事例が多く生じており、その移動目的においても、経済的利益の追求のみならず、教育、亡命、戦争、難民など、ますます多様化している。

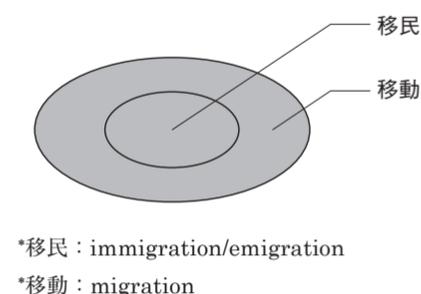
近年、こうした移民論の限界を指摘する主張が少しずつ出はじめている。ここでは、筆者の見解に近い三者の主張を紹介しておきたい。金暲学は、人の国際移動に関する大部分の研究が移住者の「一回的」移住を前提としていると指摘する。全世界の多様な移住者集団は、一回のみの移住でなく、「多重的」移住を経験している。とりわけ、交通・通信手段の急速な発達によって、多くの移住者は、社会文化や政治経済の領域において母国と定着国という国民国家の境界を越える「超国家的」関係を持つようになった (金, 2006: 3)。梶田孝道は、現代の移民現象は単に量的な増加や地域や方向の広がりを見ただけではわからず、その形態をきわめて多様にし、複雑な社会的な影響を見せていると述べる。移民現象を主に経済的な現象と見たり、単純な国家の管理の対象とする発想はいまだに根強い。しかし、このような発想では現実の移民の動きを説明することはできず、次々に新しい動きに裏切られ続けることになることを主張する (梶田, 2005: 19-20)。森本豊は、日本におけるこれまでの移民研究を振り返りながら、「トランスナショナル・マイグラント」 (transnational migrants) と呼ばれる移民に焦点をあてる。すなわち、国境を越えた複数の生活拠点にネットワークを構築して頻繁に移動する移民で、従来の移民の定義には納まりきれない、むしろ「在留民」に近い人々の出現に注目する。「移民」の定義そのものの再考を促す事象をどのような表現と理論的枠組みで捉えていくのが改めて問われている (森本, 2008: 29)。いずれにしても、二国間に限定される従来の移民論を否定的に認識している見解である。国境を越える人間を主体とし、彼らのトランスナショナルな移動を、国家本位ではなく移動者本位の観点から多面的に考える必要がある。

韓国の学界においても、既存の移民論をめぐる認識の変化が少しずつ見えはじめている。たとえば、2007年2月に発足した「韓国移民学会」はまだ歩みを始めたばかりの段階であるため、同学会が如何なる活動を展開するのを見守る必要がある。しかし、同学会は、1990年代の初頭に発足した在外韓人学会の趣旨や活動とは差別化されている。在外韓人学会は、海外へ移動する (または移動した) 「(在外) 同胞」をその研究対象としている。これに対して、韓国移民学会は、海外へ向かうコリアンの国際移動のみならず、韓国社会へ移住してくる外国人までも視野に入れている。同学会の英語名も “Korea International Migration Association (KIMA)” となっている。さらには、日本移民政策学会のように、韓国移民学会は韓国政府の関連政策にも関心を持っている。これは、今日の韓国社会が「在外同胞」問題だけでなく、次第に増えていく「在韓外国人」問題を同時に考慮せざるを得ない時代的状况に直面しているということを示唆する。この流れに沿う形で、韓国の学界における認識の中心軸も、ナショナリズムに基づく「同胞の国際移動」から、普遍主義に基づく「人間の国際移動」へと徐々に移動している。すなわち、民族/国家という境界内の議論から、いかにしてその境界を越えられるかの議論に変わりつつある。

以上では、従来の移民論をやや批判的に捉えてみたが、人の国際移動に関わる事象を国家単位で語られるこの移民論から完全に切り離すことはできない。グローバリゼーションと移民問題との関係論を専門領域とする伊豫谷登士翁の表現を借りると、国境をつくり上げた近代こそが越境する人の移動を生み出したのであり、移民研究はグローバルとナショナルとをつなぐ結節点に位置すると同時に (伊豫谷, 2001: i - ii), 移民はグローバルとナショナルとの狭間で揺れ動くアンビバレントな位置に置かれている (伊豫谷, 2001: 21)。グローバリズムとナショナリズムが闘い合う中で、過渡期的な運命を迎えている既存の移民論にも配慮すべき余地が依然としてあるという点を付け加えておきたい。

これらの観点をふまえ、本論文では、一貫して「移動」 (migration) という言葉を使用している。本論文で用いられる「移動」という言葉は、「移民」の意味を含む包括的な上位概念と位置づけられる。図2は、両概念の関係をわかりやすく図式化したものである。時代は、「移民」から「移動」へと移行したと言ってよい。

図2 「移民」と「移動」の概念設定



出所: 筆者作図

(2) 「コリアン・ディアスポラ」再考

次に、人の国際移動に関するもう一つ概念である「ディアスポラ」 (diaspora) について再考する。この言葉は、近年、人文社会の学問領域を問わずに注目を集めてきた用語の一つである。シンポジウムや学術論文においてもこの言葉を目にするのは容易である。後述する「コリアン・ディアスポラ」をはじめ、最近では、聞き慣れない「華人ディアスポラ」, 「ジャパニーズ・ディアスポラ」, 「沖縄人ディアスポラ」, 「台湾人ディアスポラ」などの語もしばしば登場している。ディアスポラという用語が何故この時期に再登場し、また、人々 (研究者たち) はそれを使いたがるのか、筆者の見解を加えつつ、ディアスポラ概念に内在する本来の特徴についての理解を深めたい。

悲惨な民族的離散を強いられたユダヤ人を指す言葉に限定されたディアスポラという概念は、本来の否定的な意味から肯定的な意味へと逆転する方向で発展しつつある。今日、この概念が学界でよく用いられるようになったのも、こうしたディアスポラ概念の変容に起因するものであろう。今後、ディアスポラの持つ狭義の意味と広義の意味の隔たりをどう埋めるかが課題として残る。研究対象とするエスニック集団の国際移動にディアスポラ概念からアプローチする場合、そのように

する理論背景などを明確に示すことに十分な注意を払わなければならない。しかし、現実にはディアスポラ概念はこれらの問題意識を持たずに用いられる場合が多い。

こうしたディアスポラ概念とその変容を参考とし、ディアスポラはどのような共通点をその特徴として持っているのかを考察する。民族はそれぞれの歴史的背景を持つため、ディアスポラを一言で定義することは非常に難しいが、このことはディアスポラ概念への包括的な理解を求めするためには必要なことでもある。ディアスポラ理論の権威として知られているコーエンは、ディアスポラに共通する特徴を下記のようにまとめている (Cohen, 1997 : 26 ; コーエン, 2001 : 59)。

- ① その多くは母国から精神的な外傷を受けて複数の異郷の地へ離散する。
- ② それとは異なり、仕事探しや貿易のため、さらには植民地を拡大するなどの野望を達成するために母国を自発的に離れる意向を持っている。
- ③ 母国に関して、その地理的な位置、歴史などにまつわる共通の記憶や神話を持つ。
- ④ 先祖代々の土地であると推定される故郷を心の中で理想的に描き、その地の維持、再建、安全、繁栄に対し、また場合によっては建国に対して共通の強い関心を持つ。要するに、理想化された「母国像」を共有している。
- ⑤ 海外に分散した後も、家族訪問や母国投資など「回帰の動き」を見せる。
- ⑥ 長い年月にわたって維持し続けた強いエスニックな集団意識を持つ。その根底にあるのは、自分たちは特別であるという感覚であり、共通の歴史であり、また運命共同体であるという確信である。
- ⑦ 他の国に定住している同じエスニックの者たちと同胞としての連帯感と親近感を持っている。
- ⑧ 受け入れ社会との間に何らかの形で厄介な関係や複雑な感情が存在する。それは、少なくとも受容されていないことを意味し、場合によっては新たな災難がそのディアスポラ集団を襲う可能性を示唆している。
- ⑨ 多元主義に対して寛容な受け入れ国においては素晴らしく創造的で豊かな生活をする能力と可能性を秘めている⁶。

①と②の項目は、ディアスポラ概念にかかわる特徴である。すでに明らかにしたように、否定的な意味合い (①) と肯定的な意味合い (②) という特徴をディアスポラ概念は併せ持つ。③と④と⑤は、ディアスポラと彼らの母国との関係の特徴づけしている。ディアスポラ集団は、母国に関する記憶と神話を共有し、その母国への「回帰本能」を常に有する。⑥と⑦の項目は、ディアスポラのアイデンティティに関する特徴で、彼らは共通のエスニック・アイデンティティを持ち、(たとえ異なる地域にいても) 互いに強い連帯意識を抱く。⑧と⑨は、ディアスポラを受け入れるホスト社会との関係における特徴である。両者の関係の如何によっては大きく異なる結果を呼ぶほど、ディアスポラとホスト社会は互いに敏感な関係を保っていると説明している。

以上のコーエンの説を参考とし、次の点に言及しておきたい。すなわち、ナショナリズムの観点

からディアスポラの特徴をつかむことができる。ディアスポラとナショナリズムは基本的に水と油のような関係である。両概念は、複雑に絡み合っているものの完全に混じり合うことはない。国際社会における 200 あまりの国家と、その 15 倍に相当する 3,000 あまりの民族集団 (エスニック・グループ) の間には大きな「ズレ」が存在する。国家はナショナリズムという権力 (時と場合によっては暴力) を武器として、民族集団をその領域内に収め込もうとする。しかし、民族集団はそれを拒み、独自の言語や文化に基づく彼らのエスニック・アイデンティティを維持し続けようとする。こうした国家と民族における境界線の不一致は、民族の離散を促し、さらにはその民族に属する人々も国境を越えてディアスポラ化していく。

以下では、人の国際移動に関する以上の理論的検討をふまえて、国境を越えるコリアンの国際移動をどのような理論的枠組みから考えればよいのか、また彼らの移動をディアスポラの視点から捉えられるかどうかについて論じる。

近年、「コリアン・ディアスポラ」という造語が議論を呼んでいる。学術会議などで頻繁に使われるようになり、ディアスポラ概念をもってコリアンの国際移動を一括りにしようとする動きが出てきている。学界や民間レベルのみならず、政府関係者からもディアスポラという言葉を使うようになってきている。たとえば、海外のコリアンに関する政策と支援事業を主導している在外同胞財団の関係者は、「コリアン・ディアスポラを知っていますか」という題目のコラムを『東亜日報』に寄せ、あたかもこの用語を一般読者に認知させようとしているかのような印象を与えている。同コラムの中では、国境を越えるコリアンをディアスポラと呼ぶ具体的な理由には言及されておらず、「国境の壁が低くなりつつある 21 世紀のディアスポラ時代において、世界のあらゆる所へ渡っている『コリアン・ディアスポラ』が韓民族の世界進出における大きな力になってくれるだろう。韓民族は連帯感が強く、情緒が互いに似ていると言われているのではないか」⁷ という主張のみが述べられている。さらに韓国では、『ディアスポラ研究』(Journal of Diaspora Studies)⁸ という学術誌も 2007 年に創刊された程である。

朴明圭は、ディアスポラという概念がこれほど注目を集めるようになった理由を以下のように分析する。同氏は、1990 年以後の脱冷戦と国際化現象と共に深化された全地球的移動と文化的混合化への関心がディアスポラ概念の拡散へ繋がったと指摘する。脱冷戦と民主化という内外の変化を同時に経験した韓国社会においても、1990 年代以降、全世界に散らばっているコリアンと朝鮮半島内に暮らすコリアンとの相互関係が再認識され、また在外コリアンのアイデンティティに関する多様な議論も展開された。このような過程の中でディアスポラ概念が積極的に導入された (崔ほか, 2004 : 160)。すでに考察した移民論は、国民国家の間を行き来する「国際」的な人口移動を客観化しようとする傾向が強い。それに対しディアスポラ論は、超国家的に越境する人々とその民族集団の移動経験や、その経験から形成された混合的アイデンティティに焦点を当てた議論である。その意味では、ディアスポラをめぐる議論は「脱近代を試みる議論」とも受け取れる。

一方、韓相大は、ディアスポラをトランスナショナルという用語 (氏はこの言葉を「人」を表す名詞として使用) と比較してコリアンの国際移動を解釈している。つまり、ディアスポラは、自らの意志とは無関係に母国を離れ、望郷の悲しみの中で暮らす人々である。彼らは強制的に母国から離

れたため、強い民族的所属感を持ち、他の民族に対しても必要以上に排他的である。さらに、彼らは母胎から離脱したという虚しさを抱き、母国への帰巢（帰還）を当然のことと考える。これに対して、トランスナショナルは、よりよい生活の質を求め、自らの意志によって母国を離れる人々である。彼らはナショナリズムから脱皮し、居住国内の他民族と他文化を受け入れつつ、それらと共存する。市民権は本人の利益になる国家で取得し、その行為を民族的所属感とは無関係であると認識する。日本による植民地支配期に、中国、日本、ロシアへ移動した同胞たちは歴史の犠牲者としてのディアスポラと言ってよい。しかし、1970年代から急増し始めるアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ヨーロッパなどの地に移したコリアンは、ディアスポラではなくトランスナショナルと見なすべきであると主張する⁹。

以上、コリアンの国際移動をディアスポラの観点から検討した。部分的ではあるが、コリアンの国際移動をディアスポラ概念によって説明できる余地もあることを確認した。しかし、コリアンの全地球的な移動をこのディアスポラ概念を用いて検討され始めたのは近年のことであり、同概念の適用がいかなる問題意識をわれわれに投げ掛けているのかについての議論もきわめて不十分である（崔ほか、2004：163-164）。これに加えて、コーエンも指摘したディアスポラの一特徴である「理想化された母国像を共有し、絶えず回帰の動きを見せる」という点が、国際移動をしたすべてのコリアンに適用できるかどうかの判断も非常に難しい。ディアスポラ研究の権威であるコーエンさえも、前述した著書の中で、「ディアスポラ」としてのコリアンについて一度も言及したことがない。これらを考慮すれば、「コリアン・ディアスポラ」という合成語は、非常に抽象的・観念的なものであり、一般化するには十分な議論と検証の時間が要される。

4 ディアスポラ社会としての特徴

以上の内容をふまえて、全世界の「コリアン・ディアスポラ」社会に共通して見られる特徴として、次の2点を挙げたい。まず、彼らの移動とナショナリズムとの関係についての特徴である。すなわち、人々の国際移動のダイナミズムとナショナリズムが複雑に関わり合う現象が越境コリアンにも見られる。そういった意味から、移動する主体としての「個人」と、その移動に何らかの影響を与えるナショナリズムを作り出す「国家（民族）」との関係性とその変容を明らかにする作業は極めて重要である¹⁰。近現代におけるコリアンの国際移動とナショナリズムの関係性において、ナショナリズムに基づく近代の移動が、現代の移動に収斂されていく。その際に、「同胞」という概念を媒介とし、近代におけるコリアンの国際移動は「民族独立のための同胞」という言説で規定され、また現代における彼らの移動は「国家発展のための同胞」という新しい言説へと表象されていくプロセス（系譜性）を保つ（羅、2013a：223）。

現在、韓国政府は在外コリアンと新しい形態の「関係」を模索するために、様々な努力と展開を見せている。韓国社会においても、国際化時代を迎え、在外コリアンとの人的・物的交流が増加し、彼らへの関心が徐々に高まっている。韓国政府もこうした流れに沿い、1998年6月に発表した「100 大政課題」の一つに在外同胞問題を含めている。また、「在外同胞はわれわれの国力」という認

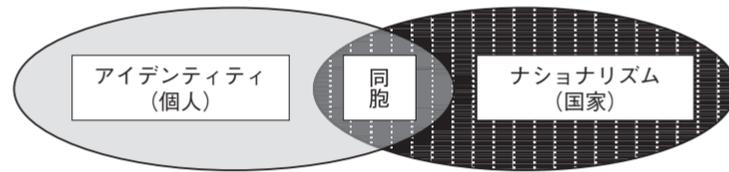
識の下で、韓国政府は、彼らの居住国での地位向上と民族的アイデンティティの維持に多くの努力を傾けている（李ほか、2002：4）。韓国政府の近年の動きとしては、2007年に「世界韓人の日」（“Korean Day”）を制定したことが挙げられる。この「世界韓人の日」とは、「国民には我が在外同胞の大切さを、在外国民には韓民族としてのアイデンティティと自負心を向上させる」ために定められた国の公式記念日である。韓国政府は毎年秋ごろに記念式典を初めとする様々なイベントを開催し、日本、中国、アメリカなど、全世界の異なる国家・地域に散在している在外同胞が一堂に会するさまざまな機会を設けようとしている。一見、これは前述したコーエンの「他の地域に定住している同じエスニックの者たちと同胞としての連帯感と親近感を持つ」というディアスポラの特徴とも一脈相通するものがある。しかし、こうした「イベントの政治学」の根底には、「内外同胞を一つにしたい」という韓国政府（母国）のナショナリズムがある。また、そのイベントに参加できる在外コリアンは限られており、数多くの在外コリアンには、そのイベントへの招待状すら送られてこない。

次に、コリアンの国際移動とアイデンティティとの関係についての特徴である。歴史の中で疎外されてきた一人ひとりの国際移動に「光」を与える作業をおこない、移動する当事者であるコリアン個人が果たしてどのような背景で国際移動を決心し、また、移動と定着の過程で彼らのアイデンティティはいかに揺れ、変容してきたのかを実証することもきわめて重要である。これは、移動するコリアンの「心の問題」に焦点を当てることにより、そこから彼らの心の中に形成される自己アイデンティティの「重層性」と「多様性」を把握することに繋がる。

実際に、近現代における越境コリアンに形成されたアイデンティティは、「多様性」と「重層性」をその特徴とする。さまざまな移動の経験から形成された彼らの自己アイデンティティは非常に複合的なものである。しかし、前述したように、彼らは「民族的独立」と「国家発展」のために「同胞」という集団意識を常に持ち続けてきたため、彼らのアイデンティティは非常に画一的であると理解（誤解）されやすいという側面がある（羅、2013b：9）。とりわけ在日コリアンは、ロシア、中国、アメリカなどに移動したコリアンとは異なり、当時の植民地宗主国である日本へ移動した特殊な例であるため、彼らの自己アイデンティティは民族・国家と結びついて拡大・再生産される過程の繰り返しの中で非常に画一的かつ集団的なものとして認識される傾向が強い（羅、2013b：5）。このように、それぞれの移動経験とそのアイデンティティが異なるものであったにもかかわらず、彼らの人生とアイデンティティは常に国家、民族、同胞というナショナリズムとの関係から自由ではなかった。すなわち、彼らは多様で重層的なアイデンティティを形成しつつも、一方では「同胞」という言説を媒介とするナショナリズムとの連結の輪を断ち切ることができなかった。よって、移動するコリアンは、絶えず自己アイデンティティの問題に苦悩せざるをえない、二律背反的な人生を歩むしかなかった。図3は、こうした彼らの複雑なアイデンティティ構造を図式化したものである。

一方、在外同胞に対する関心が非常に大きい韓国社会でありながらも、その「同胞」に対する態度と認識はかなり二面的であることを指摘しておきたい。韓国（人）にとっての在外コリアンは、「同胞」であると同時に、「外国人」でもある。たとえば、近年数多くの朝鮮族が経済的な目的で韓国へ移動しているが、彼らに対する韓国社会の視線は非常に冷たい。文化的な同質性から韓国へ移動することを夢見る中国朝鮮族の期待とは裏腹に、韓国社会の中国朝鮮族への認識は「在外同胞」と

図3 移動するコリアンのアイデンティティ構造



出所：筆者作図

いうイメージより「不法就労している外国人労働者」か「韓国語を話す中国人」というイメージが強い(金, 2007:37)。これは、韓国人と朝鮮族の相互認識に食い違いが生じていることを意味する。韓国を「同胞の社会」と認識していた朝鮮族は、韓国への移動後は深刻なアイデンティティの混乱を体験させられるようになる。このような事情からか、「韓国に行けばむしろ淘汰される」¹¹、「韓国に行ったら詐欺師を警戒しなければならない」¹²と思う朝鮮族が増えている。

5 おわりに

以上、本論文では、コリアンの国際移動に関する比較の観点を与えつつ、彼らの移動の全体像を描き出し、さらにはナショナリズムに基づく偏狭な観点の限界を乗り越えることを試みた。以下では、本論文の学問的意義と今後の課題・展望を述べて締めくくりたい。

第1に、本論文は新しい理論的枠組みを提示した。本論文では、「移民」という近代的概念の限界を批判的にとらえ、普遍性と主体性を保つ「移動」という概念で国境を越えるコリアンを総合的に通観しようとした。そのため、本論文は「移民研究」ではなく「移動研究」である。コリアンの国際移動に関する数多くの事実と知識を機械的に羅列するのではなく、それらをめぐる事象の表象にはどのような本質的意味が込められているのかについて考える契機を与えることに重点を置いた。

第2に、本論文は「底辺」で生きる越境コリアンのアイデンティティを、重層的なものとして捉えなおそうとした。移動する主体としての彼らが、「民族」、「同胞」、「国民」、「個人」として如何に自己アイデンティティを確立していくのかを検討した。特に在日コリアンの場合、彼らに見られるアイデンティティの複雑さを強調したが、その意味では、彼らが自分の帰属性について苦悩するということは当然であると考えられる。今後の研究では、「底辺」で生きる人々や個人の様々な移動生活史を積極的に描き出すことが求められる。

第3に、150年近い歴史を有するコリアンの国際移動(史)に対する学界の関心はそれほど大きいものではなく、関連研究を「周辺領域」(side)として認識してきた傾向がある。その理由はどこにあるのか、より関心を持つためにはどうすればよいのか、などの本質的・構造的な問いに対し、本論文は、既存の研究とは差別化された新しい観点を提示する役割を果たすものであると考える。森本豊は、「移民研究は、古くて新しく、様々な地域を取り込んだ『無限の可能性』を秘めた研究分野」と規定する。さらに、移民/移住に内在する多様性という特徴により、人の国際移動を扱

う研究では、歴史学、社会学、文化人類学、政治学、国際関係学など多様な学問分野からアプローチを試みる事が可能であり、それぞれの学問が隣接学問と接続できる学際的(interdisciplinary)なアプローチも可能であると言う(森本, 2008:37-38)。そういった意味から、コリアンの国際移動(史)研究も、その如何によっては発展の可能性が大きい。コリアンの国際移動という事例研究が、国民国家のあり方を相対化させると同時に、他の民族や人々の国際移動への理解を深める学問的な礎になることを期待する。

最後に、コリアンの国際移動を東アジアという地域の観点から捉えなおす必要がある。すなわち、これは、コリアンのダイナミックな域内移動が国家、国境、国民、民族といった既存の体制や概念を如何に揺るがし、新たな地域空間とそこでの共通の帰属意識を創る担い手としてどのような役割を果たしているのかを明らかにすることである。ラベンスタイン(E. G. Ravenstein)は1885年の論文の中で、移動者のほとんどは短距離移動をする主張した(Ravenstein, 1885)。平野健一郎は2005年の論文の中で、人と文化の国際移動によって国境に無数の「穴」があく「国境の多孔化」(porous borders)という現象が現在のアジア地域で起きていると指摘する(平野, 2005:55)。120年という歳月を隔てたラベンスタイン・平野、両者の主張、つまり「移動の近距離性」と「国境の多孔化」を合わせると、朝鮮半島の人々と文化のアジアへの広がりには的確に当てはまる。越境するコリアンの国際移動を、東アジアにおける人の流れの「実態」をとらえる具体的な事例の一つとして位置づけ、彼らのダイナミックなリージョナル・マイグレーションを分析することは、同地域における他の民族や人々の越境現象を理解する一助になると考える。また、国境を越える人々の移動によって文化の移動、さらには文化の交流と創造が行われるという認識に基づき、コリアンの域内移動に伴うコリア文化の域内移動は東アジアにおける「文化の混合化」にも貢献できると考える。

*1 「コリアン」という言葉は、ナショナリズムにとらわれずに済む最もふさわしい呼び方である。本論文の中で、「コリアン」という言葉を一貫して用いる理由として、次の3点を挙げる。1点目は、用語の中立性である。代わりとなる用語として、「韓国人」、「韓人」、「韓民族」、「朝鮮人」などが考えられるが、いずれの用語もナショナリズムから自由であるとは言えない。2点目は、用語の広義性である。コリアンの国際移動は南北に分かれる前の近代から始まったという歴史的背景から、より広義的な用語を用いる必要がある。3点目は、用語の国際性である。「コリアン」は元々英語から来ており、国際的にも理解されやすい。要するに、本論文における「コリアン」とは、南北を含む朝鮮半島に何らかの文化的・精神的ルーツを持つ人々のことを指し、その人々の国境を越える行為を「コリアンの国際移動」とする。

*2 『黒龍江新聞』2006年10月23日付。

*3 『東亜日報』2009年3月10日付。

*4 『太平洋雑誌』第1巻第7号, 1914年3月, 37-38頁。

*5 人の国際移動を一方的に市場の論理にゆだねず、また国益に完全に従属させず、人および労働者の権利—文化的権利も含む—を保障するという意味での「人権レジーム」の構築がアジアでは今課題となっている。ヨーロッパ連合(EU)の認める「人の移動の自由」(free circulation of persons)は、相互主義の枠付けがあるとは言え、国境を越える移動と居住の自由、市民権の相当部分へのアクセスを保障している。同化的アプローチ傾向の強いアジアが学ぶべき点である(立教大学平和・コミュニティ研究機構主催ワークショップ資料集「人の国際移動と人権: EU, アジア, 日本」, 於立教大学, 2008年3月1日, 趣旨説明文から引用)。

*6 一方、サフラン(William Safran)もディアスポラ集団の持つ特徴として、①彼ら自身や祖先が特定の起源をも

つ「中心」から二つ以上の「周辺」、すなわち外国の領域に散在していること、②ももとの故国——その心理的な位置、歴史、業績——についての集団的な記憶、展望、神話を維持していること、③ホスト社会に十分に受け入れられていない—あるいはそうすることができない—と信じ、それゆえ部分的にせよその社会から疎外され、孤立していると感じていること、④祖先の地を真正で理想的な「ふるさと」とみなし、その地を彼ら自身、あるいは子孫がいつの日か戻る（べき）所とみなしていること、⑤故国の保全、回復、およびその安全と繁栄に集団として関わるべきだと信じていること、⑥故国に関し直接的に、あるいは代弁者を通して何らかの形で言及関与し続けていること、の6点を挙げている。ディアスポラの特徴に関するコーエンの見解と重なる点が多い(リャン, 2005: 201)。

*7 『東亜日報』2004年7月30日付。

*8 全南大学の世界韓商文化研究団による発刊。

*9 『在外同胞新聞』第165号, 2009年1月23日付。

*10 しかし、現在のところ「個人」と「国家」の二者を相互対峙させ、コリアンの国際移動を総合的・理論的に検討したものはほとんど見当たらない。本論文は、これまで皆無に近かった「個人」レベルの観点を積極的に取り上げ、ナショナリズムに根ざしている従来の分析枠組みに対する異説を提示する試みである。

*11 『吉林新聞』2009年4月14日付。

*12 『吉林新聞』2009年4月23日付。

《参考文献》

- 李ソノウほか, 2002『国際移動と社会同化』ソウル大学出版部(韓国語)
- 伊豫谷登士翁, 2001『グローバリゼーションと移民』有信堂
- 梶田孝道編, 2005『新・国際社会学』名古屋大学出版会
- 韓国外交通商部編, 2013『在外同胞現況』韓国外交通商部
- 韓国外国語大学歴史文化研究所編, 2003『独立国家共同体地域における新興高麗人社会のネットワーク』在外同胞財団(韓国語)
- 金暲学, 2006『国際移住とインド人ディアスポラ』集文堂(韓国語)
- 金永基, 2007『国境を越える移動によるエスニック・アイデンティティの変化: 韓国ソウル市中国朝鮮族の事例から』佐々木衛編『越境する移動とコミュニティの再構築』東方書店, 37~53頁
- ロビン・コーエン著/駒井洋監訳, 2001『グローバル・ディアスポラ』明石書店
- 戴エイカ, 1999『多文化主義とディアスポラ』明石書店
- 崔協ほか, 2004『韓国の少数者—実態と展望』ハヌルアカデミー(韓国語)
- 鄭棟柱, 1995『カレイスキー, もう一つの民族史』ウリ文学社(韓国語)
- 平野健一郎, 2005『アジアにおける地域性の創生—その原因を求めて』山本武彦編『地域主義の国際比較: アジア太平洋・ヨーロッパ・西半球を中心にして』早稲田大学出版部, 31~64頁
- 森本豊富, 2008『日本における移民研究の動向と展望』『移民研究年報』第14号, 23~45頁
- 羅京洙, 2013a『コリアンの国際移動とナショナリズム—『同胞』という言説の系譜』『アジア太平洋討究』第20号, 211~225頁
- 羅京洙, 2013b『トランスナショナリズムから見る在日コリアンのアイデンティティ変容』『民族研究』第56号(韓国語), 4~23頁
- ソニア・リャン著/中西恭子訳, 2005『コリアン・ディアスポラ—在日朝鮮人とアイデンティティ』明石書店
- Cohen, R., 1997, *Global Diasporas: an introduction*, Seattle: University of Washington Press
- Ravenstein, E. G., 1885, The Laws of Migration, *Journal of the Statistical Society of London*, 48(2), pp. 167-235

A Study of the “Korean Diaspora”: Reflecting on and Groping for New Perspectives

RHA Kyung-Soo

Gakushuin Women's College

Key Words: Korean diaspora, nationalism, identity

This article clarifies the history, the current situation, and the prospects concerning the dynamic international migration of Korean people transcending national borders. At the same time, this article critically examines the discourse regarding their migration and attempts to present new points of view. The main contents of this article include four points. First, a general view of the historical background of the international migration of Korean people in modern times focuses mainly on migration to Russia, China, Japan, and the United States. Second, based on the main theory and its transformation related to the phenomenon of international migration, this article reconsiders theoretically the international migration of Korean people with diverse historical backgrounds. In particular, this article explores the feature and the limit of the theory and the concepts of immigration, emigration, and diaspora that have not yet been adequately considered. Third, this article analyzes the commonly observed characteristics of the Korean diaspora from the viewpoints of the relationship to nationalism and identity transformation. Fourth and finally, this article also attempts to reconsider the Korean diaspora that has been accepted to date within the framework of nation or race as “transnational migrants” crossing borders within East Asia beyond the framework of the national boundary.